様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０８９３

研究課題名（和文）古墳時代豪族居館と王宮の企画論を中心とする比較研究

研究課題名（英文）Comparative Study Mainly on the Plan Design between the Residence of Powerful Clans in the Tumulus Period and its Royal Palaces

研究代表者
橋本　博文（HASHIMOTO, HIROFUMI）

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：２０１９８６９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：2014年度からの調査・研究により、古墳時代豪族居館と王宮との関係が分かってきた。特に、三ツ寺Ｉ遺跡や北谷遺跡のレーダー探査やボーリング調査の成果によって豪族居館では突出部の位置や数などの特徴から平面企画の上で類型が存在することが判明した。卑弥呼の王宮とも言われる奈良県纒向遺跡は東西軸をとって建物が左右対称に並ぶ。それは豪族居館にはほとんどみられない特徴で、後の王宮の特徴に近い。ただし、それらが南北軸であるのに対し、東西軸を取っている点が相違点である。これは古代中国の影響を受けている可能性が考えられる。なお、葺石をもつ居館・王宮の上毛野と大和、さらには朝鮮半島との技術系譜・関係が注目される。

研究成果の概要（英文）：The relationship between the residence of powerful clans in the Tumulus period and its royal palaces has become clear. In particular, by the result of radar investigation of Mitsudera I and Kitayatsu remains the existence of a type on plane plan has become obvious from the characteristics of position of projection and numbers in the residences of powerful clans. In the remains of Makimukuin Nara Prefecture the buildings line in symmetry on East-West axes. It is a characteristic which cannot be found in the residences of other powerful clans. This characteristic is similar to the one of the later royal palaces. However, the difference between the two is that the former is East-West axes, while the latter is South-North axes. It can be thought that this is owing to influence by the ancient China. Furthermore, technical genealogy and relationships between Kamitsukeno and Yamato of residences and royal palaces with gravel spread over old mounds and the Korean Peninsula are noteworthy.

研究分野：日本考古学

キーワード：古墳時代　豪族居館　王宮　比較研究　企画論　レーダー探査　突出部　左右対称配置

## １．研究開始当初の背景

①これまで日本列島における古墳時代王宮の研究は文献史学の側のみから行われてきた。それは考古学的な物的証拠が殆ど確認されていなかったことによる。ところが、最近、奈良県桜井市の纒向遺跡や脇本遺跡の発掘調査が進んで、その実態が明らかになってきた（橋本輝彦 2013「豪族居館と大王の宮」『古墳時代の考古学』6・人々の暮らしと社会、116-129 頁、同成社）。そこで、王宮と豪族居館とをリンクさせて、その関連性を探る手掛かりが得られたのである。

②一方、古墳の企画論が古くから唱えられているかたわら、同時代の産物である古墳被葬者の生前の活動拠点である、いわゆる豪族居館に関しては、その企画性についての議論が低調である。それは類似した形態の居館が多くは発見されていないことと、古墳のように地上に現れていることが稀なため、地下に眠っている居館を認識できずにいることに起因している。古墳時代豪族居館研究の嚆矢となった群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡でさえ、調査で判明している部分は全体の約 3 分の１程度である。その三ツ寺Ⅰ遺跡に関しては、現在考古学の概説書など単行本はもちろん、多くの教科書で取り上げられている。そこではあたかも全貌が判明したかのような復元図や復元模型が掲載されている。ところが、群馬県高崎市北谷遺跡の発見により、同じ地域圏に存在する三ツ寺Ⅰ遺跡との比較が行えるようになった。

③先に、七田忠昭氏が弥生時代の環濠集落、吉野ヶ里遺跡の内郭部の張り出し部を伴う形状から、古墳時代の豪族居館をも含めて比較検討し、中国古代の都城の馬面・甕城などからの影響を考えている。

## ２．研究の目的

①畿内の大王の宮の可能性が高まった脇本遺跡との比較をし、地方大型居館と列島最上位の大王の宮跡との共通点と相違点を明らかにしたい。

②なお、脇本遺跡では、最近堀と護岸の葺石が確認された。それを群馬県下の同様な葺石をもつ三ツ寺Ⅰ遺跡や北谷遺跡、本宿郷土遺跡、奈良県下の布留杣之内遺跡や名柄遺跡などと比較し、さらには韓半島の王城である夢村土城や風納土城などと対比し、その技術系譜を明らかにしたい。

③庄内式期～布留０式期の纒向遺跡の王宮と推定される遺構と同時期各地の居館関連遺跡を比較することによって纒向遺跡の「王宮」としての特徴、居館との異質性を浮かび上がらせることができると予想される。また、古墳時代中期の脇本遺跡と同時期の地方最大級の豪族居館を対比させることによって、同様にその共通性、異質性を明らかにすることができよう。列島最上位の大王の王宮と地方豪族の居館との規模や質的な違いを鮮明にし、ひいては日本古代国家形成に向けての古墳時代の階層的な社会構造や政治構造を明らかにすることを目的とする。

## ３．研究の方法

①当研究は、古墳時代の地方の大型居館と畿内の王宮との比較を築造企画論をとおして試みるものである。また、築造技術という観点から石垣の有無と湛水の有無の相関性を探るべく、堀の堆積物をボーリングで採集し、その自然科学分析を行うものである。なお、形態等全容の判明していない大型居館の堀部のレーダー探査と試掘を行い、形態・規模・張り出し部の有無などを明らかにする。基本的に、脇本遺跡と時期的にも対比される北関東群馬県前橋市笂井八日市遺跡と栃木県宇都宮市権現山遺跡の古墳時代中期の大型居館の発掘調査・レーダー探査・ボーリング調査を中心に実施する。

②一方、畿内の王宮遺跡、脇本遺跡の石垣部のレーダー探査を行う。

③朝鮮半島の王宮遺跡・豪族居館関連遺跡を

訪ね、日本列島のものとの共通点・相違点を探る。

## ４．研究成果

### ①三ツ寺Ⅰ遺跡復元案

A 案（下城　正氏案）これは当時調査を担当された今は亡き下城正氏の説である。下城氏は発掘調査によって明らかになった事実をもとに、確実な部分のみの復元案を示している。北西辺の南部の張り出し部、南西辺の北部の張り出し部は復元していない。南東部の大型の張り出し部を北西部の発掘資料をもとに復元しているが、それは外側の「受け」を東側に設定する案となっている。

B 案（若狭　徹氏案）それに対し、若狭徹氏は微細なデータを見逃さずに下城氏の復元しなかった北西辺南部の張り出し、南西辺西部の張り出しを復元し、さらに、下城氏の南東部の出入り口施設の「受け」を東側でなく南側に設ける案を提起している。それは上越新幹線法線内の調査で確認された礫の分布を根拠にしたものである。

C 案（橋本案）わたしが気になったのは、先ず若狭氏の復元した北西辺南側張り出し部、南西辺西部張り出し部の有無である。後者に関しては、内部の柵列がそこで切れているので、張り出し部に沿って続くものと考えられ、張り出し部の存在がうかがわれる。また、前者も直線的だった柵列がその部分で外反する傾向が認められ、張り出し部に沿う可能性が高い。そこで、ボーリングした結果、現地表下約 80cm で、礫が外側に張り出したように当たるので、張り出し部の存在はほぼ確実だろう。続いて、北東辺、南東辺に張り出し部は無いのかという点である。「兄弟居館」とも言われた北谷遺跡を見ると、対辺にも張り出し部が確認されているので、三ツ寺Ⅰ遺跡にも存在して不思議はない。そこで、レーダー探査をした結果、北東辺の東側に幅約 13m、長さ約 8m の張り出し部が存在する可能性が高まった。また、ボーリングの結果、部分的ながら礫にも当たることが判明した。さらに、その西側でも礫の当たる範囲があり、張り出し部の存在が疑われる。次に南東辺であるが、猿府川に沿う畦をボーリングした結果、礫が直線的に続き、今のところ、東側には張り出し部の痕跡は確認されていない。しかし、猿府川の屈折する南東辺西側ではその部分で突出しており、礫の当たりも張り出して認められる。この部分に関しては、下城氏・若狭氏共に大型張り出し部を想定し、通常の張り出し部を考慮していない。現状で、この西側は直線的に西方に延びている。その斜面にはところどころ石垣状に礫がのぞいている。加えて、その裾部をボーリングすると直線的に礫に当たる。ただし、想定張り出

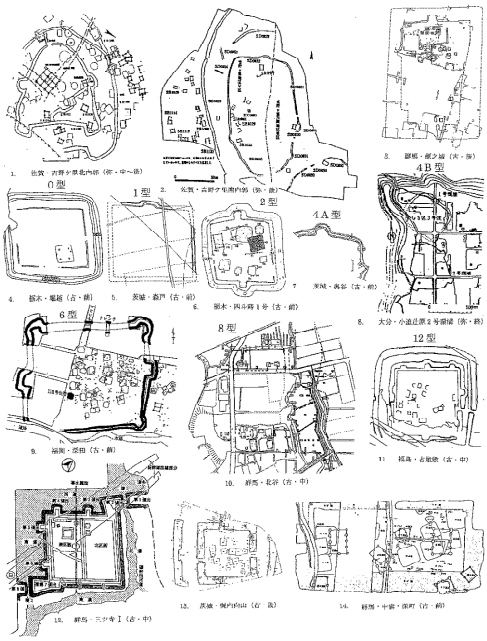


図１　居館平面形のバリエーション

し部に近くなると、礫に当たらなくなる。すなわち、この部分に通常の張り出しが存在する可能性が高い。するとこの西側部分は一定の幅をもって直線的に外部に向かって延びていることになる。これは北谷遺跡の様相に通じる。

②そこで、張り出し部の様相を、主にその位置と数から「０型」、「1 型」、「2 型」、「4A 型」、「4B 型」、「6 型」、「8 型」、「12 型」などと

いうように分類し、全国の古墳時代豪族居館の編年・地域性・系譜などを検討した。

なお、北谷遺跡の南辺の張り出し部の有無を確認すべく、ボーリング調査を試みた。その結果、他の辺と同様に張り出し部が２つあることが判明した。よって、北谷遺跡は各辺２つずつの張り出し部を持つことが明らかになった。

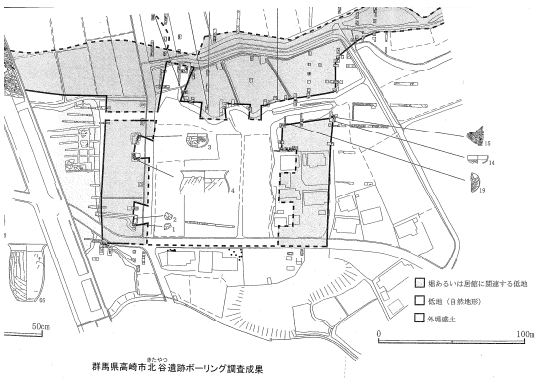


図２　北谷遺跡ボーリング調査成果図

レーダー探査の結果、三ツ寺Ⅰ遺跡の内部には、竪穴遺構と柵列の存在が新たに確認できた。倉庫群の存在は掘立柱建物ということと現在の民家の影響で検出には至らなかった。ただし、北東調査区のエリア A では竪穴建物跡と掘立柱建物の企画的な配列が想定された。一方、南東調査区のエリア B では竪穴建物跡の存在が１棟だけ推定され、張り出し部の存在も確認できた。

以上のように、三ツ寺Ⅰ遺跡と北谷遺跡のレーダー探査とボーリング探査の結果、兄弟居館として比較する上の基礎データが得られた。

ちなみに、４A 型は九州以外に南関東・北関東にも存在することが明らかになった。時期的には庄内併行期から布留０併行期という古い時期にみられる。

③畿内の王宮と比較するために、地方の大型居館のうちで、主に栃木県宇都宮市権現山遺跡の発掘調査やレーダー探査を行ってきた。その結果、以下のような事実が判明した。

柵列

堀との関係で問題となるのが柵列である。先回の第４次調査で２列の柵列を確認した

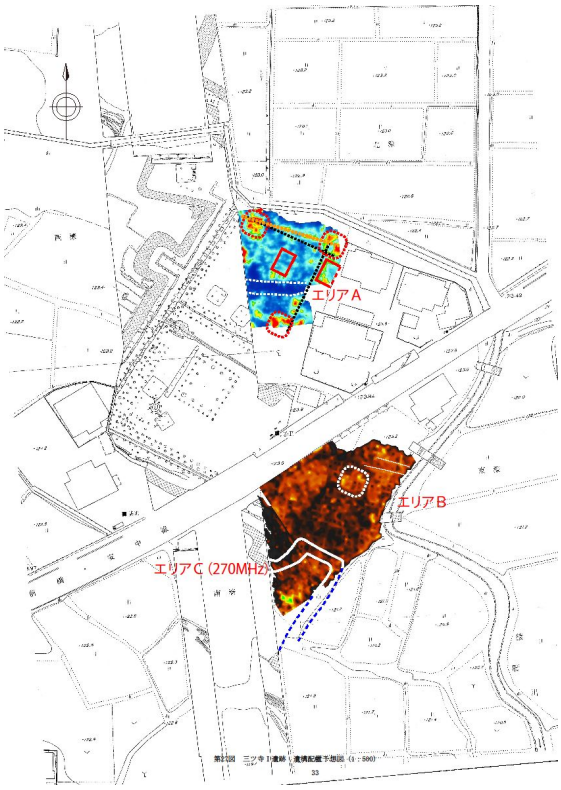


図３　三ツ寺Ⅰ遺跡レーダー探査成果図

が、それがほぼ平行に走ることから同時期のものと判断した。ところが、今回の５次調査でその延長線上に当たる西側の様相が知れ、４次調査で確認した南側の柵列（以下、１号柵列と呼ぶ）は座標値 Y=6,525 あたりで直角に曲がり北上する様子が判明した。一方、北側の柵列（以下、2 号柵列と呼ぶ）は座標値 Y=6,500 近くまで若干カーブしながら続くことが明らかになった。さらに、今回新たに別の柵列（3 号柵列）が座標値 Y=6,520 あたりから検出され出し、座標値 Y=6,505 近くで直角に曲がることが確認された。これによって、1 号柵列と 2 号柵列は別の時期のものということが認識された。さらに、2 号柵列と 3 号柵列とはほぼ平行な関係にあり、ピット間距離・ピットの形態・ピットの直径・ピットの覆土を総合的に判断して同時期のものであるという見解に達した。次に、堀との関係であるが、1a 号溝が 1 号柵列とほぼ平行に走り、1b 号溝の北辺の推定ラインが 2・3 号柵列と

平行になることが想定されるようになった。このことから、古墳時代中期の居館は後者の組み合わせであるとの結論に至った。しかも、2 号柵列と 3 号柵列とは交わらないので、その間の空間が通路状になることになる。3 号柵列の東側が 1a 号溝によって破壊されているので、どこまで続くか不明であるが、この食い違い構造は他の居館関連の遺跡、兵庫県松野遺跡や福島県古屋敷遺跡などで知られている。ちなみに、先に指摘した堀の一番狭くなる部分に橋が架かって、出入り口施設となっていたことも推定される。となると、居館の内部の空間は３分割されていたとみることもできよう。なお、1a 号溝の段階にも柵列を伴い、居館に準じるかたちで当遺跡が利用されていたことが示唆される。

居館にともなう堀

南西区、南辺の堀と西辺の堀の合流地点に設けた A トレンチ、B トレンチの発掘調査からは、以下のような所見が得られた。まず、南北の A トレンチでは、居館内側の堀の立ち上がりが急であることが知れた。また、北寄りの底面に段差があり、さらに中央部付近に畝状の遺構があることが判明した。これによって最低２時期の堀が重なっていることがうかがわれた。この状況は昨年度の第４次調査の知見と共通する部分と異なる部分がある。共通点は底面の段差で、相違点は畝状遺構である。この畝状遺構は新しく掘った溝に貼っている可能性が高い。総じて北半（1a 号溝）が新しく、南半（1b 号溝）が古い。土器の出土量は南半が多い。南半から出土する土器は古墳時代中期の５世紀前半の土師器が主体である。一方、北半は上層からではあるが、小ぶりな蓋坏の蓋にカエリのある７世紀後半の須恵器が出土している。南半の遺構検出面下約 27cm には群馬の榛名山二ツ岳噴出火山灰（Hr-FA）の堆積がみられるものの、北半には認められない。以上からも、南半（1b 号溝）が古く、北半（1a 号溝）が新しいことの傍証となろう。よって、古墳時代中期の居館の堀の規模は 1a 号溝に切られていることを勘案して復元すると上幅約 3.5m、下幅 2.2m、確認面からの深さ約 69cm となる。断面形は古墳時代の居館に通有の逆台形である。

以上、権現山遺跡の調査から張り出し部や石垣を伴わない大型豪族居館の実態が明らかになった。これは群馬の三ツ寺Ⅰ遺跡や北谷遺跡などとの大きな違いである。なお、柵列で分割された内部の企画は、今後豪族居館や王宮との比較研究で重視される。

④2017 年 3 月 19 日・20 日の両日、新潟大学災害・復興科学研究所准教授卜部厚志、同准教授片岡香子両氏の協力のもとにレーダー探査を実施した。探査箇所は、脇本遺跡の第 18 次調査第２区の隣接地で、同調査で検出された池状遺構の規模と形態を確認することを目的に行ったものである。

同遺跡はワカタケル大王（雄略天皇）の泊瀬朝倉宮の伝承地で、考古学的な発掘調査の結果、古墳時代中期の５世紀後半～飛鳥時代の７世紀にかけての遺構が発見されている。

調査の結果、池状遺構の北側の護岸と西側への拡がりが想定されるようになった。

⑤橋本博文は 2014 年度から 2016 年度の 3 ヵ年にわたる科学研究費補助金基盤研究（C）で「古墳時代豪族居館と王宮の企画論を中心とする比較研究」を実施してきた。その成果の一部は 2016 年度の日本考古学協会 82 回総会（会場：東京学芸大学）で「古墳時代豪族居館の企画性」と題して発表してきた。このたび、最終年度ということで、その成果を研究者はもとより国民の皆様に公開し、還元することにした。そこで、当時の中心地である畿内の現・奈良県桜井市で確認されている卑弥呼の王宮とも言われている纒向遺跡とワカタケル大王（雄略天皇）の宮とも目される脇本遺跡を取り上げて、日本列島の東西で検出されている古墳時代の豪族居館と王宮の

関連性を検討することにした。講師には、科研代表者の橋本博文の他に、奈良からそれらの遺跡の発掘担当者でもある桜井市纒向学研究センター主任研究員の橋本輝彦氏を招いて「ヤマトの大王宮」という中央の視点で語っていただいた。一方、逆に橋本博文は「豪族居館から見た王宮」という地方からの視点で論ずることにした。

その結果、纒向遺跡の大型掘立柱建物を中心とする東西軸の左右対称配置は、古墳時代豪族居館とは異質で、後の飛鳥時代から奈良時代にかけての王宮に通じる側面があるものの、後者の南北軸とは異なり、相違点も認められた。また、一方で古墳時代豪族居館によく見かける独立棟持ち柱付き掘立柱建物が纒向遺跡の中に存在する点を共通点として指摘することができた。これは両者に共通する祭祀性を具有する点と理解することができる。さらに、三ツ寺Ⅰ遺跡等古墳時代豪族居館の一部に石垣施設をもつものとの関係で、畿内の王宮遺跡候補である脇本遺跡は必ずしも王宮本体に石垣施設の存在が確認された事例というわけではないということが明らかになった。なお、石垣施設を有するものが、古墳時代豪族居館の中では群馬と畿内の奈良に集中するのは注目される。それはまた、朝鮮半島の土城にも認められ、彼我との技術的系譜も注視された。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計　1 件）

① 日本考古学協会第 82 回総会、東京学芸大学（東京都小金井市）
橋本博文「古墳時代豪族居館の企画性」
2016 年 5 月 29 日

〔図書〕（計　3 件）

①橋本博文ほか 9 名『新潟大学考古学研究室調査研究報告』17、総頁 48（pp.1-21）、新潟大学人文学部、2017 年 3 月
②橋本博文ほか 13 名『新潟大学考古学研究室調査研究報告』16、総頁 53（pp.9-30）新潟大学人文学部、2016 年 3 月
③橋本博文ほか 13 名『新潟大学考古学研究室調査研究報告』15、総頁 97（pp.1-34）新潟大学人文学部、2015 年 3 月

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

## ６．研究組織

(1)研究代表者
橋本博文（HASHIMOTO,Hirofumi）
新潟大学　人文社会・教育科学系　教授
研究者番号：20198691

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）

前原 豊（MAEHARA, Yutaka）
今平利幸（KONPEI, Toshiyuki）
橋本輝彦（HASHIMOTO, Teruhiko）
早田 勉（SOUDA, Tsutomu）
卜部厚志（URABE, Atsushi）
片岡香子（KATAOKA, Kyoko）